OPINION

教科書Ｐ２３Ｌ２に書かれている「葬式でのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた」という記述には、作者の意図的な欠落が隠れていると考えます。その動作が持つ意味や、誰に向かってそれをやったのか、といった情報を、あえて書かなかったように思われるからです。

「両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつける」という動作は作中、ルロイ修道士が相手を叱るときの仕草として描かれています。ルロイ修道士の葬式の席で「わたし」がこの動作を行った意味について、どう考えればいいでしょうか。

一見するとこれは、「わたし」からルロイ修道士へ向けた行動のように読めます。その場合、再会したときに病気のことを隠していたルロイ修道士を責めるような気持ちが込められていることになります。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。わたしたちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

井上ひさし
『握手』
教科書Ｐ２３より

しかし私には、この動作が「わたし」自身にも向けられているように読めます。ルロイ修道士は病気だと薄々感づいていたにもかかわらず、踏み込んだ言葉をかけられなかった。そんな自分に対する後悔や自責の念が、「両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつける」ことにつながったのではないでしょうか。

作者があえて詳しい情報を書かなかったおかげで、こうした複数の解釈ができました。その点で、この意図的な欠落は効果的だったと言えます。

TEXT BY Y.Y.

OPINION

教科書本文で三度も繰り返されている「両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた」という記述は、作者の意図的な反復だと考えます。

一回目は、「わたし」が天使園を無断で抜け出して東京へ遊びに行ったときのこと。ちなみにこのときはルロイ修道士の平手打ちが飛びました。二回目は、東京に遊びに行くために、先生からもらった靴下や下着、にわとりを売り払ってしまったことを、大人になってから改めて伝えたとき。このときのルロイ修道士は、指を打ちつけつつも、懐かしい思い出に対して笑顔を見せていました。

そして三回目が、葬式の場面。ルロイ修道士が重病を隠していたと聞いた「わたし」は、「知らぬ間に、両手の人差し指を交差させ、せわしく打ちつけていた」と書いてあります。この記述からは、動作を通してルロイ修道士とつながろうとする「わたし」の姿が読み取れるのではないでしょうか。

二人の間には血のつながりがありません。しかし、家族のいない「わたし」にとってはルロイ修道士こそが家族であり、心の拠り所でもあったと思います。そんな相手の癖と同じ動作を体現することによって、つながりを感じたかったのではないでしょうか。

この動作は、ルロイ修道士が「わたし」に向けてくれた深い愛情を彷彿とさせます。無断で消えて心配をかけてしまった自分を、本気で叱ってくれたこと。そんな過去も、懐かしい思い出として笑ってくれたこと。

家族のように愛情を注いでくれたルロイ修道士に感謝を伝えたいのに、今はもう直接伝えることができない。そのことへのやるせなさも、この意図的な反復からは読み取ることができると思います。

TEXT BY A.Y.

ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。これは危険信号だった。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次には、きっと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちは痛かった。

井上ひさし
『握手』
教科書Ｐ１８より